

フルベッキの背景

オランダ，アメリカの調査を中心に

村瀬 寿代

はじめに

新教宣教師フルベッキについては、彼の来日以後に関する論文や文献はあるものの、来日以前、特に生まれ故郷であるオランダのザイストでの状況や、彼の宗教的背景などに触れたものは数少ない。『英学と宣教の諸相』で小林功芳氏が「彼の名声にもかかわらず彼の家族に関して不明な点が多く、研究の対象になっている」¹⁾と指摘するように、今までフルベッキの家族について調査されたことはほとんどなかった。また、兄弟・姉妹については皆無と言ってよいほど問題にされてこなかった、かつ彼の家庭環境や教育について述べられたこともあまりなかった。その理由として、ザイストに残る記録が調査されたことがない、「フルベッキ書簡」を詳細に検討したものが少ない、フルベッキはモラヴィア教育を受けたがモラヴィア派の研究者が日本にはほとんどいない、などが挙げられるだろう。また、フルベッキは多くを語らず、書いたものはあまり残っていない上に、関連資料も少ないので、あまり全体像が見えてこない人物でもある。部分的にその功績などが取り上げられることはあっても、総括して研究されたことはなく、研究対象も主に来日以後に

キーワード：フルベッキ，ザイスト，Verbeek，Moravia，Verbeck

限られているのが現状である。本稿では、来日までのフルベッキに焦点をあて、従来、調査されたことのなかった、彼の家族やザイストでの状況を明らかにし、宗教や宗派から彼が得たものは何であったのかを考察し、後に日本で活躍する背景を探ることをねらいとする。

1. フルベッキという名前と両親について

フルベッキのオランダ語名はフェルビーク (Verbeek) と言う。22歳でアメリカに渡ったとき、アメリカ人が発音しやすいように、ヴァーベック (Verbeck) という姓に変えた²⁾。日本ではフルベッキとして知られているので、かえて、もとのオランダ語に近い音になる。名前はギドー・ヘルマン・フリドリッ (Guido Hermann Fridolin) であるが、ほとんどすべての文献で Herman と綴られていて n が一つ少ない。しかし、ザイストでの出生届けはドイツ語綴りの Hermann となっているので、こちらが正しい³⁾。書簡などのサインには Hermann を省いて、GF Verbeck などとすることが多いので、あまり注意されることなく間違っただま紹介されてきたようである。祖先にはドイツに生まれて暮らした者も多く、両親もドイツに生まれた。フルベッキは母語のオランダ語よりもドイツ語のほうがよくできたというが、子供の名前だけに限らず、何かとドイツ風を好んだ家系であったのかもしれない。

フルベッキの両親に関しても、その誕生年、出生地、名前を正確に記したものは見当たらないので、ザイストに残る記録から明らかにする。フルベッキは1830年1月23日に8人兄弟・姉妹の第六子として誕生した。父はカールもしくはカレル・ハインリッヒ・ウィルヘルム・フェルビーク (Carl or Carel Heinrich Wilhelm Verbeek, 1797-1864) といい、ドイツ中部のモルスドルフで生まれた。法律家で、1825年から1849年までオランダのライゼンブルクの村長を勤め、1832年から1851年まではザイストの評議委員でもあった。母はマリア・ヤコミナ・アンナ・ケラーマンもしくはケルダーマン (Maria

Jacomina Anna Kellerman or Kelderman, 1791-1852) で、ドイツのヘデスドルフという場所で生まれた。1818年12月9日にザイストで結婚したが、夫のカールよりも早く1852年にザイストで亡くなっている。

フルベッキ一家はザイスト中心部から少し離れた場所に住んでいた。父は酢の製造業も営み、働かなくとも生活できるほどの不動産を有していたので、相当裕福な暮らし向きだったと想像できる。そんな中、フルベッキ家の8人の子供たちは何不自由なく成長していったことだろう。当時のザイストには初等教育のためのモラヴィア派の学校があり、他にはプロテスタントの学校が一つあるだけであった。フルベッキは初等教育では評判のよいモラヴィア派の学校に通うことになる。

2. モラヴィア派とツィンツェンドルフ

『フルベッキ書簡集』には、フルベッキの「一家はモラビアン宗の信徒であったから、裕福な中でも高潔な生活をいとんだ」⁴⁾とあるが、ザイストには、両親や兄弟・姉妹全員がルター派として登録されている。しかし、フルベッキは幼い頃からモラヴィア教育を受けたのだから、そこから感化を受けただろうことは否定できないし、日本伝道を志したのもその影響からだとはよく言われることである。『日蘭学会会誌』所収の「フルベッキの運命」では、フルベッキは「宗教の面ではモラビアン派の影響を強く受けその神学上の寛大さ、宗教心の薄いのはモラビアン派教育を受けたことに起因するという」⁵⁾としている。だが、具体的にどのように「神学上寛大」であったのかは記されていない。また、宣教師を多く出しているモラヴィア派が、実際「宗教心が薄い」宗派であったのかどうかは大いに疑問が残る。モラヴィア派は日本に渡っていないため、なじみの薄い宗派でもあり、一般にはあまり知られてはいない。どういった宗派であるのか、宣教師としてのフルベッキを理解する上でも、説明が必要であろう。

モラヴィア派はフスの流れを汲む一派で、日本語ではモラヴィア兄弟団

(Moravian Brethren) と称される。その起源をさかのぼると宗教改革以前の15世紀になるが、18世紀にドイツのツィンツェンドルフ (Nicholas Ludwig von Zinzendorf, 1700-1760) 伯爵の保護を受けて以後発展し、組織が整えられた。ツィンツェンドルフはドレスデンに生まれ、オーストリア貴族の血を引く熱心なルター派敬虔主義者であった。法律顧問官として働き始めたのだが、迫害を逃れてきたモラヴィア派信徒を自分の領地に受け入れたことがきっかけで、その後同派は発展する。その地はヘルンフート (Herrnhut, 主の守りの意) と呼ばれるセツルメントになり、後にモラヴィア兄弟団の中心地となる。ツィンツェンドルフは1727年に仕事を辞職し、それ以後、オランダを始めヨーロッパやアメリカを旅行し、各地に宗教的コミュニティを形成して、自らその指導者となり、敬虔な生活を営んだ。⁶⁾

モラヴィア派には他宗派とは大きく異なる特色がいくつかあるが、その中でも、フルベッキの宣教方法や考え方に影響を及ぼしていると考えられる特徴がある。まず、第一に、宗派にこだわらなかったことが挙げられる。ツィンツェンドルフはキリストとの霊的つながりを持つ個人的救済を構想して、心の宗教 (heart religion) を主張した。彼は自らの教会をルター教会とみなし⁷⁾、信徒たちには各々の教会に属しながらモラヴィア派の活動に参加することを期待した⁸⁾。宗派によって、またその人のおかれた状況によって、それぞれの貢献の仕方があると考えたのである。この点でツィンツェンドルフは宗派にこだわらないというよりは、かなり頑固で、もとの宗派を変えることを禁じたと言ってもよいほどであった。実際、ヘルンフートにはカトリックも含め様々な宗派から人が集まってきていた。また、彼自身は終生ルター教会に属し、兄弟団はいずれ他宗派に吸収されるであろうことを予測し、モラヴィア派信徒になることを奨励しなかった。彼の考え方はその後のモラヴィア派の在り方にまで影響を及ぼし、同派が大きく発展することはなかった⁹⁾。

次の特徴として、信徒が大きく二種類に分けられていたことが挙げられる。一つは独自のコミュニティを形成して、道徳的・敬虔な共同生活を営むグ

ループで、信徒を年齢、性別、既婚・独身の有無によって分けて住ませ、子供を寄宿学校に入れるなど、そのやり方は独特であった。ツィンツェンドルフは、各々個人の状況や立場、年齢などによってキリストとの関係も異なると考えたのであった。¹⁰⁾ もう一方は他宗派に属し、それぞれの社会にいながらにしてモラヴィア派の活動に参加する者で、ディアスポラ (Diaspora) と呼ばれた。後の宣教師にもディアスポラが多い。¹¹⁾

最後に、モラヴィア派はいち早く宣教師を派遣して、海外伝道に力を入れたことで知られる。特に辺境地への伝道には積極的で、早くも1732年に、最初の宣教師2人を西インド諸島 (現在はアメリカ領のバージン諸島、セント・トーマス) に派遣した¹²⁾。その後もグリーンランド、スリナム、アメリカ、南アフリカ、ラブラドルなどに次々と宣教師が派遣されている¹³⁾。モラヴィア派は早くから宣教師を多く派遣したが、同派が派遣先で大きく発展を遂げることはなかった。これもまた、ツィンツェンドルフの考え方が反映しているためで、宗派にこだわらなかったため、無理に改宗を迫ることはなかったし、宣教師が引き上げる際には、他宗派の宣教師に後を委ねたりしたことが原因であるという。

ツィンツェンドルフはザイストにも影響を与えたが、他宗派を否定しないばかりか、彼自身がルター派であった。また、フルベッキは少なくとも、故郷のザイストを出て渡米するまでは、ルター教会に属していた。モラヴィア派は他宗派を認めており、フルベッキが宗派を変える必要は少しもなかったのである。モラヴィア教育を受けたからと言って、一家全員がモラヴィア派の信徒であったと考えるのは性急すぎると言わざるを得ない。渡米して後、彼は複数の宗派を経験することになる。日本へはオランダ改革派の宣教師として派遣されてきた。そして、彼は長崎で、親しかった聖公会の宣教師に子供たちの洗礼を依頼した。次女は聖公会の宣教師として日本で働き、長男の家系は現在にいたるまでアメリカの聖公会に属している。しかし、フルベッキ自身は聖公会のやり方に決して賛成していたわけではなかった。幼い頃からモラヴィア教育を受け、複数の宗派に接してきたために、宗派という枠組

みにとらわれなかったということは、彼が子供さえも他宗派に任せたという事実をとっても明らかであろう。

フルベッキは決して日本人に宗教を押し付けず、西欧的価値観を無理に日本に移植しようとはしなかった。こういったこともまた、個人のおかれた状況によって、神への貢献の仕方が異なるのだと考えたツィンツェンドルフの考え方を反映しているように思われてならない。フルベッキは日本には日本人の神への貢献の仕方があり、それは西欧と同じ尺度で計る必要がないと信じ、宗派どころか、宗教を超えたところに神の存在を認め、伝道において自ら実践したのではないだろうか。それが結果的に日本人に受け入れられ、信頼されることにつながったのだろう。敬虔主義者であるツィンツェンドルフによって率いられ、彼個人の意向を強く引き継いできたモラヴィア派が「宗教心が薄い」とは決して言えないことは、そのたどってきた歴史を見ても明らかである。また、「神学上寛大」と言うよりも、むしろ、純粋に神と個人との関係を重視したため、神学よりは道徳的な生活に力を入れたと考えるほうがより妥当であると思われる。

3. ザイストとモラヴィア派

ザイストはオランダ中部、ユトレヒトに隣接し、現在の人口は約6万人である。フルベッキがモラヴィアの学校に通っていた1839年当時の人口は2151人で、モラヴィア派信徒は224人、ルター派信徒は46人であった¹⁴⁾。ザイストの町はモラヴィア派なくしては語れない。モラヴィア派は1737年にオランダに土地を買い求め、ザイストにコミュニティーが定着したのは1746年である。市の中心部、市庁舎の近くにHET SLOT ZEIST（ザイスト城）¹⁵⁾と呼ばれる城があり、代々城の持ち主はザイストで第一の権力者とみなされていた。城の建設は1677年に始まり、建物とその庭園はヴェルサイユ宮殿を小型に模して作られた。現在は修復され、緑の多い静かな場所にひっそりと建っている。

フルベッキの背景

モラヴィア派のコミュニティがこの地に定着するのは、鉄器商人、コルネリス・シェリンガー（Cornelis Schellinger）がザイスト城を購入したことに始まる。彼はアムステルダムの旧家の子であり、取り立てて商売をする必要もないほど裕福であったらしい。1745年にシェリンガーは城を買い求め、財産として加えるとともに城主となることで名誉を手にした。彼自身はメノー派（メノナイト）であったが、モラヴィア派の人々に城を開放し、庭を与え、コミュニティはザイストに定着した。¹⁶⁾だが、シェリンガーとモラヴィア派信徒たちの仲は必ずしも良好ではなく、彼らは信徒ではない城の所有者にザイストの地を追い出されることを恐れた。ザイスト城が1767年に売りに出されると、モラヴィア派の指導者はむしろ喜び、ツインツェンドルフの2番目の娘、マリー・アグネスの名前で城が購入された。しかし、マリー・アグネスの名前で城が購入されたとはいえ、彼女はザイストを数度訪れただけで住んだことはなく、一度も城を自分の持ち物だと考えたことはなかったようである。

ザイスト城は何度も売りに出され、持ち主が変わり、1924年以来、市の所有となり今日に至っている¹⁷⁾。また、城には所有者だけが住んでいたのではなく、1771年以降は多くの人が間借りをするようになり、モラヴィア教会が敷地内におかれたこともあった。フルベッキの母方の祖父は1779年から1787年まで城で事務官の仕事についており、彼の死後、その妻は城の右側の一画に住んだ。その頃、城は四つの居住用建物に改築されていて、当時まだ幼かったフルベッキの母もまた、その母とともに城に住んでいたようである¹⁸⁾。母も住んでいたザイスト城は、フルベッキにとっても思い出深いものであったろうし、彼の学校はザイスト城に隣接する建物にあったので、少年フルベッキは毎日ザイスト城を見て学校に通ったことだろう。

4．フルベッキの兄弟・姉妹たちに関する記録

フルベッキの兄弟・姉妹については「フルベッキ書簡」にはほとんど記述

がない。フルベッキの伝記 *Verbeck of Japan* で、著者のWEグリフィスが兄弟・姉妹について多少言及しているものの¹⁹⁾、記述が複雑で、わずかに姉妹3人の名前を挙げていただけである。その他、家族について記したものに『明治維新とあるお雇い外国人---フルベッキの生涯---』²⁰⁾があるが、*Verbeck of Japan* を参考にしただけのものようで、8人兄弟・姉妹の6番目に生まれたはずのフルベッキに、妹二人と弟一人が登場するという、矛盾の多い内容であり信頼がおけない。まず、フルベッキの家族構成と、両親の死後、一家がどのような道をたどることになるかを、ザイストでの調査から明らかにする。

フルベッキの兄弟・姉妹の名前・年齢などは以下の通りである。(年齢は1839年当時)

長女：Emma Maria Emily (19歳，1820年7月2日生まれ。)

次女：Aline Dorothea Helma (16歳，1822年生まれ，1855年3月19日ザイストで死亡。)

三女：Mina Hendrietta Conradina (15歳，1824年生まれ，1851年10月1日渡米。)

長男：Walter Edmond Wilhelm (13歳，後に渡米。)

四女：Bianca Agnes Rosalia (12歳，1827年生まれ，1864年，父の死後渡米。)

次男：Guido Hermann Fridolin (9歳，1830年1月23日生まれ，1852年渡米。1898年3月10日東京で死亡。)

三男：Willem Hugo Arthur (8歳，1831年8月24日生まれ，1863年ザイストで死亡。)

五女：Selma Rosamunda Louigarde (6歳，1833年生まれ，後に渡米。)²¹⁾

これ以外に、使用人としてMaria De Brucin (32歳)，Gerretje Donath (14歳)がいた。上の子供たち4人はライゼンブルクで生まれ、ピアンカ以下4

人はザイストで生まれている。長女のエマは早い時期にザイストで亡くなり、生き残った兄弟・姉妹はすべて渡米したので、おそらく現在ザイストにフルベッキの直接の子孫は残っていないだろうということである。母は早くに亡くなっているが、父の世話をしていたのは四女のピアンカで、フルベッキ家の財産も彼女が継いだ。しかし、兄弟たちがすべてアメリカに渡っていたので、彼女もまた父の死後渡米したようである。

フルベッキの伝記の著者、WEグリフィスによると、フルベッキはモラヴィア教育を受けた後、ユトレヒトの工業学校（Politechnic Institute of Utrecht）に入学し、グロット教授（Professor Grotte）の下で学んだと、具体的に教授の名前を出して報告している²²⁾。この記述が原因で、フルベッキはユトレヒトで工学の教育を受けたというのが通説になっているようだ。ザイストのアーキビスト、ルーン氏によると、当時ザイストには初等教育の学校があっただけなので、それ以上の教育を子弟が受ける場合はほとんどがユトレヒトに送られたということである。だが、グリフィスの言う Polytechnic Institute of Utrecht という名称の学校は当時ユトレヒトに存在しなかった。大学はあったのだが、工業系の専門学校や高等学校のようなものはなかったらしい。しかも、ザイストの公文書には、1849年にフルベッキはザイストで鍛冶屋（smith）をしていたとあり、1852年には鍛冶屋（ironsmith）の弟子奉公をしていたとの記録が残っている。ルーン氏は、もしもフルベッキが大学や専門学校で学んだとすれば、渡米する直前である1852年に鍛冶屋の弟子奉公をするはずがないと言う。また、ルーン氏によると、たとえ高等教育でなくとも、何らかの形で工学の教育を受けた者が、鍛冶屋をするとは到底考えられないので、もしも学んだとすれば、おそらく渡米後に工学教育を受けたのではないかということであった。フルベッキは1864年9月17日付書簡の中で、「日本の研究者や技師が、特に機械工学について困難な問題、少なくとも彼らにとって難しい問題を解くのに私が時々手助けしていたのが理由のようです。そのような場合、若い頃の私の職業、つまり土木・機械工学がこれだけ年月を経ても役に立ちます」²³⁾とやっている。ここでは、自分の工学

教育に関しては触れてはいないものの、「土木・機械工学」と具体的に述べ、日本の研究者の手助けをするほどであったと証言しているのだから、彼が何らかの工学教育を受けたと考えるのが自然だろう。

では、アメリカでの状況はどうであったのだろうか。1852年9月2日、フルベッキはアメリカに向かう。*Verbek of Japan* には翌年1853年の初頭から10ヶ月あまり、ウィスコンシン州、グリーンベイの工場で働いたとある。そして、ブルックリンに行き、アーカンソー州ヘレナで土木技師としての仕事を勧められて引き受けた。翌年の夏コレラにかかり、静養が必要でもあったので、再びグリーンベイに戻り、工場の管理を任される。宣教師を志して神学校に入るのは1856年の9月なので、秋頃まではグリーンベイに滞在していたのだろう。²⁴⁾つまり、彼は1853年から1856年まで、4年足らずの間、機械関係の仕事をしていたことになる。フルベッキが言う「若い頃の私の職業、つまり土木・機械工学」というのは、このときのことなのだろう。工学を学んだとすれば、この時期であったのかもしれない。

5. 宣教師オットー・タンクの援助

では、なぜ、フルベッキはアメリカに行き、工場で働くことになったのか。*Verbeck of Japan* には「ギドー・フルベッキがアメリカに向かうことになったのは、義弟のジョルジュ・ヴァン・デュール師の提案と誘いがあったためである。ヴァン・デュール師はスカンジナビア出身の貴族、オットー・タンク師の援助を受けていた」²⁵⁾とある。ジョルジュ・ヴァン・デュール師とは、3歳違いの末の妹、セルマの夫である。フルベッキが渡米したときには、すでにセルマと姉のミナがアメリカに来ていた。フルベッキもまたオットー・タンクの援助を受けて、彼の工場で働くことになったのであった。

ニルス・オットー・タンク (Nils Otto Tank, 1800-1864) はノルウェー出身で、父はノルウェーの財務大臣、母はモラヴィア教会に属していた。モラヴィア派宣教師としてデンマーク、スリナム、アメリカへ派遣され、特にス

リナムでは「奴隷解放のパイオニア」「自由の擁護者」として知られている。最初の妻、キャサリンの父はザイストで女子寄宿学校を設立した人で、キャサリンもこの学校で教鞭をとっていた。彼女は1844年に一人娘を残してスリナムで亡くなったため、オットー・タンクは妻を失った悲しみもあり、1847年5月27日にスリナムを離れる。²⁶⁾ 2度目の妻キャロリンはアムステルダム出身で、父はオランダ改革派の牧師であり、大変な資産家であった。オットー・タンクの最初の妻、キャサリンとともにザイストの女子寄宿学校で教えた経験もある。オットー・タンクとキャロリンは、1849年8月22日にザイストのモラヴィア教会で結婚式をあげた。1849年には、フルベッキはザイストにいたのであるし、2人の妻はザイストに暮らしていたことがあるのだから、彼は渡米前からタンク夫妻を知っていたと考えるほうが自然であろう。フルベッキの叔母、コルネリア・マリー・ケラーマンは女子寄宿学校の校長を30年以上勤めたというので²⁷⁾、オットー・タンクの妻たちとも親しい関係であっただろうと推測できる。新婚のタンク夫妻は、前妻の娘を伴い、1849年に宣教師としてアメリカに渡った²⁸⁾。

このように、亡くなった前妻も含めて、タンク夫妻とザイストとの関係は深い。しかも、夫婦ともに資産家で、宣教資金は十分にあった。実際、キャロリンは夫や義理の娘の死後も生涯アメリカを離れず、自らは質素な生活を営み、宣教や教育に惜しみなく援助を与え続けたという。フルベッキはタンク夫妻という後援者の後押しがあって、資金の心配をすることなく渡米する決心をしたのであろう。

6. アメリカ、グリーンベイでのモラヴィア派

ニューヨークに到着したフルベッキは、ウィスコンシン州、グリーンベイで働くことになった。彼が渡米した頃のグリーンベイはどんな状況であったのだろうか。

モラヴィア派宣教師が最初にアメリカに派遣されたのは1735年、ジョージ

アに向けてで、ネイティブ・アメリカンへの伝道が目的であった。ここでの伝道は失敗に終わり、1740年に再び宣教が開始され、ペンシルヴェニアのベツレヘムに拠点がおかれた。19世紀後半のアメリカのモラヴィア教会は、ドイツ人とスカンジナビア人によって発展を遂げる。ドイツ人によるモラヴィア教会は、アメリカの中西部の様々な地域に広がったのに比較して、スカンジナビア人の手になるモラヴィア教会は、ウィスコンシン州の一部のみにとどまった。フルベッキが訪れたグリーンベイは、スカンジナビアからの移民により始められた地域である。²⁹⁾

1849年、アメリカへの伝道の招きに応じて、ノルウェーの町スタハングル出身のアイヴァーソンはミルウォーキーにやってきた。彼は最初ペンシルヴェニアのベツレヘムで少数の人を相手に牧していたが、まもなく、フェット師が派遣され、二人はウィスコンシン州グリーンベイにあるフォックス川上流に土地を求めることにする。そんなときに、オットー・タンクと知り合い、タンクはウィスコンシンで、モラヴィア派のコロニーを設立するための土地を購入することになった。タンクはフォックス川西岸のフォート・ハワードに800エーカーの土地を買い求め、監督派ミッションの古い建物を借り受けた。この居留地での生活は毎朝6時の礼拝で始まり、夜8時の礼拝で終わるという規則正しいものであった。また、水曜日の夜は礼拝の時間が長く、日曜日は午前10時半、午後3時と2度の礼拝があり、ノルウェー語とデンマーク語で行われていた。そして、1850年11月17日、スカンジナビア出身の17人のメンバーが集まりモラヴィア派の会衆が始まり、これが発展して現在のウェストサイド・モラヴィア教会となった。

タンクは信徒たちに仕事を与え、ミッションの仕事を手伝った。また、建物と農地を分け、信徒の必要に応じて貸し与えた。彼はモラヴィア信徒たちが共有できるコミュニティーを望んでいたのであった。しかし、ノルウェーからの移民たちは自らの土地を持ちたいと考え移住してきたので、タンクとは意見が合わず、タンクとアイヴァーソンとの間にも対立が生じた。信徒たちは土地を購入したいと望み、現金を差し出したが、タンクは受け取りを拒

否した。コミュニティ内ではタンクへの批判が高まり、信徒のグループはアイヴァーソンとともにグリーンペイの北60マイルの場所に移り住む。こういった時期にフルベッキはオットー・タンクのコロニーにやってきたのであった。フルベッキはタンクが建設したタンクタウンで働くが、その頃タンクは企業家たちと様々な事業に取り組み、特に汽船運航を念頭において莫大な投資を行っていた。しかし、鉄道の普及などもあり事業はことごとく失敗に終わった。³⁰⁾

フルベッキはここでの生活を次のように述べている。

「この隔離された場所から伝えるニュースなどあまりありません。今、土曜日の夜ですが、また一週間耐え忍ばなければならないのです。年の終わりに向かって、時は飛ぶように過ぎていきます。(中略)おおかたの多感な青年が感じるように、私も孤独で退屈です。そして、様々な事情があるにせよ、沈んだ気分です」³¹⁾

若いフルベッキにとって、オットー・タンクのコロニーでのあまりにも理想的、道徳的な生活は窮屈なものであったのだろう。この後、彼はモラヴィア派コミュニティを離れることになる。フルベッキがコロニーにやってきた頃、信徒たちはオットー・タンクとは意見を異にし、コロニーを離れ始め、人が少なくなってきた時期であった。そういったことから、孤独に思い、ここでの生活に魅力を感じなかったのかもしれない。

このオットー・タンクに関して、フルベッキが書簡で言及しているのはただ一度だけである。長崎から中国に避難したとき、上海滞在中に、1863年7月21日付書簡の追伸で、ニューヨークの伝道局に次のような報告をしている。

「ウィスコンシン州のオットー・タンク氏に関してですが、おそらくタンク氏は訴訟に際して、証人としての私の証言を望んでいるかもしれませんが。これは私がオーバン神学校にいたときにもあった訴訟事件です。タンク氏が何を望んでいるのか私にはわかりません。そのような証言、あるいは証明がもしも必要であれば、この地のアメリカ領事館に文書で供述することができ

ます。そして、タンク氏がアメリカ領事に問い合わせればよいと思います。33年～4年頃³²⁾、鑄造工場と機械工場で働くという契約をタンク氏と交わしました。当時の私の職業はエンジニアであったからです。今回の事態は当時のことに端を発すると思われます。タンク氏はグリーンベイの人々とうまくいっておりませんでした。しかし、彼の主義として、自分から法律を犯したり、訴訟を起こすということはありません。それでもまわりの人々は彼の弱点を利用し、彼の意思や意向に反して、法廷に引きずりだそうとするのです。9年間ほどであったと思いますが、タンク氏は西インド諸島で宣教師をやっていました³³⁾。この6年間ほど彼に会っておりませんが、巨大な富と財産が、タンク氏のクリスチャンとしての性格を台無しにしてしまったのではないかと危惧しております……」³⁴⁾

ここでは、フルベッキはオットー・タンクがどんな問題をかかえていたのかは具体的に述べていない。しかし、彼がコロニーにいる頃から、訴訟が起こるほどの問題、あるいは事件があったとわかる。同情的に述べてはいるものの、フルベッキはタンクの性格について批判をするような口調である。巨大な富を持っていたために、独断的で身勝手なところがあったのだろう。フルベッキがグリーンベイを離れることになったのは、オットー・タンクの性格や、やり方に同意できなかったことも一因であると推察できる。

家族全員がルター派に所属し、幼い頃からモラヴィア派とは身近に接していたフルベッキであるが、1856年には長老派のオーバン神学校に入学し、卒業とともにオランダ改革派に転じ、改革派の宣教師として1859年、長崎に到着した。

7. フルベッキの子供たちについて

『英学と宣教の諸相』では、フルベッキには計11人の子供があり、うち夭逝した2人に関して、新たに名前を明らかにしている³⁵⁾。残念ながら、すべての子供の名前と生年月日を記してはならず、簡単な記述だけであるので、

判明した事実を整理してみたい。

長崎到着後まもなくして、フルベッキ夫妻に長女が誕生した。『フルベッキ書簡集』の1860年2月17日付書簡に記述があることから、長女の誕生についてはよく知られている。1860年1月26日に誕生し、エマ・ジャポニカ (Emma Japonica) と名付けられたのだが、生後すぐに病気にかかり、2月9日に亡くなった。³⁶⁾ 短命であったエマは長崎の稲佐山にある外国人墓地、悟心寺に埋葬された³⁷⁾。エマという名前はおそらく、フルベッキより10歳年長の姉、エマ・マリア・エミリーから取ったのだろう。翌年に誕生した長男についても、フルベッキは1861年2月6日付書簡で、1月18日に男児が生まれ、丈夫に育っていること、母子ともに健康であることを伝えている³⁸⁾。この長男はチャールズ・ヘンリー・ウィリアム (Charles Henry William) と言い、フルベッキの父の名を英語読みにして名付けられた。長崎でフルベッキが親しくしていた聖公会宣教師CMウィリアムズに洗礼を授けられたことで、生涯聖公会に属した。ウィリアムは1886年にキャサリン・ジョーダン (Katherine Jordan) と結婚。陸軍に入り、1888年からニューヨークのマンリアス陸軍学校長となり、1930年8月24日に亡くなるまで同校で校長を務めた。彼は陸軍学校のキャンパスに日本庭園を作り、そこに葬られた。17歳まで日本で暮らしたことから、日本語をしゃべること、日本語で考えることには不自由がなかったという。ウィリアムの子孫については、軍関係者が多いためか、詳細な記録が残っている。ウィリアムはその長男に、父の名前のギドー・フリドリンを付け、これ以後の直系の男子はすべてギドーの名前を与えられている。現在はギドー・フルベッキ三世 (初代フルベッキから数えて五代目) と四世がアメリカにおられ、三世はフルベッキと同じ聖職者となった。フルベッキ三世が学んだ神学校は、奇しくもウィリアムに洗礼を授けたCMウィリアムズが卒業した学校でもある。³⁹⁾

次に誕生する娘についての報告は、『フルベッキ書簡集』には収録されていないため、今まではっきりとしなかった。しかし、フルベッキは次女の生まれたときのようすを1863年2月11日付書簡で次のように書き記している。

「私の報告と手紙が遅れたのは（日常の仕事以外に）妻の出産準備があったからです。今月の2月4日に小さな娘を授かりました。神のご加護のもとに万事うまくいっております。この冬は当地の日本人の間に、例年にないほど病が流行り、私どもの使用人も病気になるしました。娘の誕生の前後の期間は、私の空き時間すべてを家族の世話に費やしました。赤ん坊はすくすくと育っており、妻も再び動けるようになっております。使用人も回復し、私も一安心しております。赤ん坊の誕生による多忙さならばいつでも歓迎です。主の恩恵でこの困難な時期を切り抜けることができ、また主は私どもにかわいい子供を与えてくださいました。夭折した長女の名前を取って、娘をエマ・ジャポニカと名付けることにしました。主がこの娘を祝福し、守護くださいますように！ 2歳を過ぎた長男のほうは背も高くなり、丈夫に育っております。長男は英語とほぼ同じくらいに日本語をうまくしゃべるようになりました」⁴⁰⁾

娘の誕生を喜び、薄命であった長女と同じ名前をつけた父親の気持ちがよく表れている内容である。次女のエマはその後カリフォルニア州オークランドで高校を卒業して、聖公会宣教師となり、立教女学院で音楽を教えた。1885年秋以来父と一緒に東京で住み、父の最期を看取った。彼女は1898年一度アメリカに戻るが、翌年東京大学お雇い教師のテリー教授と結婚して、長く日本に住む。長寿を全うし、1949年に亡くなった。

次男チャニング・ムア（Channing Moore）がいつ生まれたのかは解明できなかった。チャニング・ムアという名は、フルベッキが長崎でもっとも親しかった宣教師CMウィリアムズから取られた。三男のグスターヴ（Gustavus Adolphus）は1867年に生まれ、1937年に死去している。パリで美術を学んでいたが、そのときにイラストを描き始め、彼の作品はフランスやアメリカの新聞に掲載された。その後、アメリカに戻り、新聞社などで仕事を得、彼のイラストは一躍有名になった。1920年代には絵画に転向し、そちらに専念した。グスターヴは Verbeck という名とともに、オランダ名である Verbeek という苗字をも用い、彼の子供たちは公式には Verbeek の名前を用いたと

フルベッキの背景

いう。⁴¹⁾

フルベッキと同じ名前を与えられた四男ギドーは、1868年7月15日に生まれ、アメリカ滞在中の1884年12月初旬、16歳の若さで死去した⁴²⁾。1872年に東京のフルベッキ家にいたWEグリフィスは、「かわいいギドーは日本の日の光の化身かと思われるほどで、将来有望で快活な少年であった。ギドーは花開く前に16歳の生涯を閉じた」⁴³⁾と、ギドー少年の印象を述べている。

その後もフルベッキ家には次々と子供が誕生する。五男のフーゴー・アーサー (Hugo Arthur) は1872年12月28日に生まれた。1863年に死去したフルベッキとは1歳違いの弟、ウィレム・フーゴー・アーサーの名を付けたのだろう。1874年9月23日生まれのエレノア (Elenore) はネリーおばさんと呼ばれ、親しまれた。四女メアリー・アン (Mary Anne, 1875.12.12-1876.6.17) と六男バーナード (Bernard, 1880.2.7-1880.7.13) の誕生年は『英学と宣教の諸相』に、墓石の碑文の調査報告があり、名前とともに明らかにされた⁴⁴⁾。末子バーナードは1881年8月7日に誕生したが、これはおそらく前年に夭逝した、一つ上の兄の名前が取られたのだろう。

東京の青山墓地に眠るのはフルベッキ一人だけであるが、妻のマリア・マニヨン (Maria Manion, 1840-1911.4.2) の名前も記されている。尚、フルベッキの墓石には次のようにある。

IN MEMORIAM

GUIDO FRIDOLIN VERBEEK

BORN IN THE NETHERLANDS JAN.23 , 1830

ARRIVED IN JAPAN NOV. 7 , 1859

DIED IN JAPAN MARCH 10 , 1898

この記念碑は彼の元生徒たちによって1899年に建てられたと刻まれている。ここで目を引くのは、渡米してから長い間用いて慣れ親しんできたはずの Verbeck という名ではなく、Verbeek とオランダ語名が刻まれていることである。彼の戻るところはアメリカではなく、やはり故郷のザイストであっ

たように思われてならない。

実にフルベッキ夫婦は七男四女の子供たちに恵まれた。そのうち早世したのは男子2人、女子2人である。子供たちは宣教師や教師、軍人、芸術家と職業も多彩で、様々な分野で活躍した。

おわりに

フルベッキは開国後来日した宣教師の中でも、異色で独特な存在であったと言えるだろう。本来の宣教の仕事よりは日本への貢献でよく知られ、日本政府や日本人から絶対的な信頼を得たのである。彼は最初の10年を過ごした長崎で教育者として、後に維新で活躍する日本人たちとの人脈を築き上げた。上京してからは、政府の中枢にいて、教育・外交・政治・翻訳・法律など様々な分野で活躍した。五里霧中であった、初期の明治政府にはなくてはならない存在であった。それだけに、来日後に関しては取り上げられることも多いのだが、来日以前に関しては研究されることなく、等閑されてきた。どの文献を見ても、ほとんどが *Verbeck of Japan* から引用しただけのものや、不確実なものが多く、信頼をおけるものが少なかった。来日以前に関する研究が必要であるのは承知していたのだが、日本には資料が少なく、家族に関するものは存在しない。だが、やはりフルベッキの原点となるザイストやモラヴィア派との関係を調査しなければ、フルベッキの全体像が見えてこないことを実感し、これを探ることで、日本でのお雇いとしての貢献や宣教師としての活躍の背後にあるものを引き出すことができるのではないかと考えた。それで、国内外の資料を集め、疑問があればそれぞれの専門家や研究者などに協力をお願いし、ある程度の実事を明らかにした。しかし、まだまだ謎の部分も多く、たとえいくつかの事実を突き止めることができたからといって、後のフルベッキに一体どういった影響を与えたのか、彼の考え方にどのように反映されているのかなど、詳細には解明できていない状態である。山積みである課題を解くための第一歩として、彼の背景に焦点をあてたが、

具体的に考察していくことをこれからの研究目標の一つとしたい。

〔注〕

- 1) 小林功芳『英学と宣教の諸相』有隣堂，2000，108頁。
- 2) William Elliot Griffis, *Verbeck of Japan*, Fleming H. Revell Company, 1900, p.50.
- 3) ザイストの公文書による。尚，ザイストに残る記録に関しては，すべて，ザイスト在住のアーキビスト，ルーン氏の調査による。
- 4) 高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社，1978年，386頁。
- 5) 砂田良和「フルベッキの運命」日蘭学会，『日蘭学会会誌』第18号，1985，109頁。
- 6) History of the Moravian Church James Hutton www.everydaycounselor.com/
- 7) James D. Nelson, 1993 Grolier Electronic Publishing, Inc. URL; www.mistral.co.uk/hammerwood/zinz,htm
- 8) Zinzendorf, Nikolaus Ludwig, graf (Count) von, URL; Britannica.com
- 9) www.everdaycounselor.com/
- 10) John R. Weinlick, Albert H. Frank, *The Moravian Church through the Ages, The Moravian Church in America*, 1996, pp.59-60.
- 11) *Ibid.*, p.66.
- 12) Allen W. Schattschneider, *Through Five Hundred Years---A Popular History of the Moravian Church, The Moravian Church in America*, 1996, pp.50-52.
- 13) *The Moravian Church through the Ages, Ibid.*, pp.75-87.
- 14) ザイストの公文書による。
- 15) 英語ではthe Zeist Castle とも訳され，日本語にするとザイスト城であるが，城といっても外敵の侵入を防ぐための軍事的な建物という意味ではなく，通常，王族の保護を受けるか，あるいは王族と何らかの関係がある個人が建てたものである意味合いが強い。
- 16) Aleid W. van de Bunt, *SLOT ZEIST*, 1974, pp.15-29.

- 17) Ibid.,pp.32-33.
- 18) ザイストの公文書による。
- 19) *Verbeck of Japan*, Ibid.
- 20) 大橋昭夫・平野日出雄『明治維新とあるお雇い外国人---フルベッキの生涯---』
新人物往来社, 1988, 17-80頁。
- 21) フルベッキ一家に関してはすべてルーン氏の調査による。
- 22) *Verbeck of Japan*, Ibid., p.47.
- 23) 明治学院大学所蔵, 高谷道男教授の「フルベッキ書簡」タイプ原稿を参照。
原文には次のようにある。“ That they applied to me may also partly owing to my
sometimes having assisted native scholars or engineers in the solution of
difficult, at least for them difficult problems especially in Mechanism or
Engineering. In such cases the profession of my younger years, that of Civil &
Mechanical Engineering, proves useful even after years. ”
- 24) *Verbeck of Japan*, Ibid., pp.48-58.
- 25) Ibid., p.48.
- 26) *TRANSACTIONS of the Moravian Historical Society, Volume 29*, Whitefield
House, Nazareth, Pennsylvania, 1996
- 27) *Verbeck of Japan*, Ibid., pp.34-35.
- 28) *Voyageur, Northeast Wisconsin 's Historical Review, Volume 17, Number1*,
Summer/Fall, 2000
- 29) *The Moravian Church through the Ages*, Ibid., pp.88-99.
- 30) The West Side Moravian Church の歴史資料を参照。残念ながら, フルベッキ
に関する資料は残されていないそうである。
- 31) *Verbeck of Japan*, Ibid.,pp.56-57.
- 32) フルベッキの思い違いで「1853年~4年頃」が正しいと思われる。
- 33) オッター・タンクが西インド諸島に派遣された事実はない。彼が派遣された
のはスリナムで, 1847年, スリナムから帰国する際に西インド諸島に立ち寄っ
た。フルベッキの記憶違いであると思われる。

フルベッキの背景

- 34) 明治学院大学所蔵, 高谷道男教授の「フルベッキ書簡」タイプ原稿を参照。
- 35) 『英学と宣教の諸相』前掲書, 115頁。
- 36) 『フルベッキ書簡集』前掲書, 25頁~26頁。
- 37) レイン・R・アーンズ, ブライアン・パーク・ガフニー 『時の流れを超えて---長崎国際墓地に眠る人々---』長崎文献社, 1991, 18頁~19頁。
- 38) 『フルベッキ書簡集』前掲書, 35頁~36頁。
- 39) フルベッキ四世作成の家系図を参照。
- 40) 明治学院大学所蔵, 高谷道男教授の「フルベッキ書簡」タイプ原稿を参照。
- 41) www.lambiek.net/verbeck.htm
- 42) 『フルベッキ書簡集』前掲書, 318頁。
- 43) *Verbeck of Japan*, Ibid., p.232.
- 44) 『英学と宣教の諸相』前掲書, 115頁。

Family Tree Guido Hermann Fridolin Verbeek

<p>Jacob Johannes Verbeek (Amsterdam 3 Mar. 1739- Niesky 9 Aug. 1787)</p>	<p>Catharina Dorothea Diederichs also Dietrichs (Celle 18 Aug. 1746- Niesky 27 Aug. 1808)</p>	<p>Johann Wilhelm Henning (? - ?)</p>	<p>Johanna Schmidt (? - ?)</p>	<p>Willem (Jan) Kelderman or Kelderman (Emmerich 11 Apr. 1699, baptized in Emmerich on 19 Apr. 1699- Vianen 31 Oct. 1774)</p>	<p>Cornelia Maria Royer or Roijen (Amsterdam 14 Nov. 1700-?)</p>	<p>Jan van der Vliet (Amsterdam 4 Jan. 1717- IJsselstein 23 Apr. 1785)</p>	<p>Jacomina Hooft (Amsterdam 20 Feb. 1717- IJsselstein 30 Oct. 1784)</p>
<p>About 1778, lived in Neu-Dietendorf in Saxen-Gotha</p>		<p>Married?</p>		<p>Worked as a clerk (1731) Secretary of the state court (1738)</p>	<p>Worker of 'de IJzerstaven' Commissioner Evangelische Broedergeme</p>	<p>Married Amsterdam 15 Mar. 1740</p>	
<p>Married Herrnhut 10 February 1768</p>		<p>Married?</p>		<p>Married at a church in Vianen 2 Jun. 1728</p>			
<p>Heinrich Jan Verbeek (Neudietendorf, Thüringen 5 Aug. 1769- Amsterdam 29 Aug. 1817)</p>	<p>Settled in Utrecht from Hamburg in 1814 Left for Rotterdam in 1815 Left for England in 1816 or the first of 1817 Lived in Swol</p>	<p>Dorothea Elisabeth Henning or Hennink, or Hnnik or Hennig (Langenhagen, Hnnover 1772 or 1773-Zwolle 17 Jul. 1848)</p>	<p>Left for Germany in 1816 or the beginning of 1817 Settled in Zwolle in 1817</p>	<p>Coentraad Willem Kelderman or Kelderman (Vianen 7 Jun. 1738, baptized next day -Nieuwied or Nassau-Dietz 24 Sep. 1792)</p>	<p>Sheriff and secretary of the high manor Zeist, 1779-1787</p>	<p>(1) Johanna Gerardina de Mauregnault or de Maegnault, de Margnault, Mauregnault, deMaurignant or (de) Morregnault (Batavia ?-? buried in Utrecht 7 Oct. 1780) (2) Maria Wilhelmina van der Vliet (Zeist 28 Oct. 1754-Zeist 26 Jul. 1826) Rentier</p>	
<p>Married ? before or in 1795</p>				<p>(1) Married Utrecht 8 Jul. 1771 (2) Married Vianen 5 Sep. 1785</p>			
<p>Carl (also Carel) Heinrich Wilhelm Verbeek (Molsdorf (Saksen-Gotha) 8 Jul. 1797-Zeist 22 Feb. 1864)</p>				<p>Maria Jacobiina (also Jacomina) Anna Kelderman or Kelderman (Heddendorf near Nieuwied, 29 Dec. 1791-Zeist 3 Feb. 1852)</p>			
<p>Bailiff, afterwards mayor and secretary of Rijsenburg, 1825-1849. Member of the town-council of the municipality of Zeist, 1832-1851; assessor of Zeist, 1851 [1842, 1850-1851]. Rentier. Vinegar manufacturer. Landowner. Religion: Lutheran</p>				<p>Religion: Lutheran</p>			
<p>Married Zeist 9 December 1818</p>							
<p>Guido Hermann Fridolin Verbeek later calling himself Verbeek (Zeist, 'De Grote Koppel', 23rd January 1830-Tokyo (Japan) 10 Mar. 1898)</p>							
<p>Height: 1.74m, oval face, broad forehead, blond hair, blond eyebrow, left handed Smith-man, engineer, theologian, missionary in Japan of the Dutch Reformed Church of America, fellow-worker of the Japanese Imperial government. Arrived in 1859 in Nagasaki (Japan) Married Philadelphia (U.S.A.) 18 Apr. 1859 Maria Manion (1840-2 Apr. 1911) Religion: Lutheran</p>							

R.P.M. Rhoen. Gemeentearchief Zeist; 9 April 2002
ザイスト市、ルーン氏による家系図より作成

The Background of Guido Hermann Fridolin Verbeck

Based on the Historical Records of the Netherlands and the United States

Hisayo MURASE

Guido Hermann Fridolin Verbeck was born in Zeist, the Netherlands in 1830 and went to the United States when he was 22. After he graduated from Auburn Theology School in the state of New York, he was ordained as a missionary of Dutch Reformed Church in America and came to Nagasaki as one of the first Protestant missionaries to Japan in 1859. He helped in various ways to establish modern Japan in the late 19th century, subsequently attaining fame as an adviser to the Meiji Government.

Researchers have often concentrated on Verbeck's distinguished service or contribution to Japan and its people, yet very few tried to focus on his family records, his educational and religious background, and his early life previous to his arrival in Japan. Although Verbeck's biography, *'Verbeck of Japan'*, written by William Eliot Griffis, is one of the most important studies on Verbeck, Griffis made many incorrect statements in his writing. Most researchers seem to have believed whatever is written in *'Verbeck of Japan'*.

In this article, by studying the records of Zeist, Verbeck's family members and his early educational environment have been clarified. His religious experience, especially the Moravian education he was given, has also been taken into consideration. Verbeck's letters have been reexamined in detail to discover and confirm facts that have not been known to the public before.

The aim of this article is to offer reliable information about Verbeck in order to find out how his experience in his youth helped him to earn his position in Japan and how his religious background influenced his way of conducting mission work as well as shaping his later character as a 'hired

foreigner' in Japan.